
天使の瞬き - ANGEL ' S WINK

たのシイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の瞬き , A N G E L , S W I N K

【Nコード】

N 6 6 1 7 P

【作者名】

たのシイナ

【あらすじ】

妄想が私に書かせた“地獄に仏”的な話を、ちよつとコミカルに……。【注意】このお話に限って、ところどころ性的表現が出てきますので、苦手な方はお気を付け下さい。

1. 入院

手摺りを頼りに地下鉄の階段をやつとのこと得上がりきった。歩道へおりる前に、重い瞼を上げて空を見た。

真夏の陽射しがガラガラと眩しく、黒々と建物の構造をコントラストしている。

町田宏尚は壁に寄りかかり、自分の右脚を擦った。痛い。まるで荷物のように重い。彼はそこに座り込んだ。

だが、いきなり腰の辺りに躓いた奴がいて、

「おおっと！」

と、よろめいて転げそうになり、両足をバタつかせた。

「危ねえなあ」

こんな所に座り込んでんじゃねえよ、とでも言いたげだった。

宏尚は相手の顔を見て、

「今西さん？」と訊いた。彼の体を見て、

「もう退院したんですか？」と驚いた。

その中年の男は、携帯電話を片手に振向いて宏尚を見下ろした。すると次に、

「大丈夫ですか？」と若い女の声。

宏尚の前に赤いハイヒールを履いた足が現れた。彼と同じくらいの歳の女が立っていた。

色白で体形の美しい女。座り込んで気持ち悪そうにしていた宏尚を氣遣ったのか。

「はい」と宏尚は返した。相変わらず右足が痛いのだが、赤の他人に甘えるわけにはいかない。「大丈夫です」

見ると彼女は知っている顔だった。

「杉本さん？ 美鈴さんまで、どうしてここに？」

宏尚は目の前のふくよかな赤い唇に魅せられた。これは夢かも知れない、と彼は突然思った。

二十歳になったというのに、いまだに彼女も出来ずにいるため、こんな夢を見るのだ。
夢なら覚めろ！

呪文を唱えるくらいの間隔を置いてから、パツと目を開けた。

「町田さん？ 町田さん！」と、今度は後ろから呼ぶ人がある。

振り返ると派遣会社の営業だった。そういえばそもそも待ち合わせで、此処へ来たのだった。

「朝早くから、呼びだてして済みません。来月からの契約の更新をしないことを伝えたかったもので……」

と言うではないか。控え気味とはいえ、一応営業スマイルだ。

ええー!? そんなあ! これ、仕事中の怪我だったのにー。

すると、「こんなご時勢だし」と念押しされた。

クビ!? クビでしょ? それはないよー。これこそ夢であって欲しい。

「町田さん? 町田さん!」

また呼ばれた。今度は若い女の声だ。宏尚は薄目を開けた。

「町田さん、今西さんが退院なの。挨拶したいって……」

看護師の杉本美鈴がカーテンを引いて顔を出した。

「あ、今何時ですか?」

寝惚けた声。宏尚はベッドに片肘ついて起き上がろうとした。「あ、痛てて」足がまだ痛い。

「横になっていいのよ」

美鈴は腕時計を見て答えた。「十一時半よ」

すると「どうも」と、今西康生が顔を出した。

今朝まで隣のベッドに寝ていた中年男だ。「いろいろと仲良くしてくれて、ありがとう。町田くんも早く元気になってね」

町田宏尚は十日前にこの総合病院に運ばれた。派遣先の漬物工場で、バックして来たフォークリフトと壁の間に挟まれたのだ。

あつという間の出来事で、利き腕の右手首を骨折し、右脚の筋を痛めたらしく、思うように動かせない。

病室のベッドに寝かされたときは、熱まで出る始末でうなされた。

こんな目にあったのは、もちろん初めてのことで、救急車で運ばれたのも、入院したのも、生まれ育った田舎暮らしも含めて初めてだった。

だから自分の身に起きたことが、とんでもなく大事で、大変な目にあつたのだという思いが、熱まで出させたのかも知れない。

この病室にはベッドは他に二台有って、正面のお爺さんは脳梗塞だったが、ある程度回復したとかで、三日前に退院した。

隣のベッドの今西は、宏尚が来たときから、よく声を掛けてくれた。

なんでも今西の病は不可思議なんだそうで、仕事中に気分が悪くなり、我慢出来なくなって早退して、家で寝ていたら敷布団が茶色く染まるほどの大汗をかいたのだそうだ。

それで息子さんに付き添われての入院となったが、当初は宏尚より酷く、下半身が思うように動かなかつたらしい。

だが、今日は元気に退院して行くのだ。

以前、今西が冗談めかして言ったことがある。

『あんまり長居すると、退院手続きの請求書見て、目ん玉が飛び出てもいかんからなあ』

実際、宏尚もこの十日でいくらになっっているのか気になってしょうがない。

「町田さん」

と美鈴が戻ってきて、ベッドのまわりのカーテンを引きながら言った。「もうすぐお昼ご飯だから、その前にお小水とりましようね」

二十二歳だという美鈴は、はきはきとして明るくて綺麗な女だ。この病棟には他にも若い女の看護師はいるし、もちろん年配の看護師もいる。だが、杉本美鈴のときだけ、宏尚もどきどきが抑えられなかった。

というのは、『美鈴に触れられると欲情する』と、今西から聞かされたことがあって、それ以来余計に意識するようになってしまった。

『ウエストはギュツと締まって、胸も大きい。あの白衣の中を見てみたいものだ。たまらんだろうなあ。』

こっちは体の自由が利かない間、チ◎◎もケ◎◎の◎も見られ放題だったんだ』

と、罰当たりなことを言っていたおじさんも、今はいない。静かになった。

「いつものように、いいですね」

痛めた右足を下にして、左足を交差するように膝を立てる。

「はい」と美鈴はなんの躊躇いもなく尿瓶を突き出した。

入院して以来、宏尚はずっと紙オムツをさせられていたが、この暑さでオムツのゴムで肌がかぶれてしまったことと、オムツ自体が屈辱的だったこともあって、病院に断ってパンツとTシャツでいた。

宏尚は恥ずかしくてしようがないが、一人でトイレに行けないうちには、これも仕方のないことだった。

先ほど見た夢と、目の前の美鈴の顔が重なって、彼は妄想を見透かされたように顔を真っ赤にした。

だが、美鈴はまだ優しいほうだ。今西が言っていたが、同じ看護師でも前嶋苑香は扱いがぞんざいだという。

『細かくは言いたくないけど、あれは屈辱的だった』と、今西は嘆いていた。

きっと俺はストレス発散に使われたんだ、アラフォー苑香は早期の更年期障害なんだろう、などと文句を言っていた。

だが、普段から我儘で口数の多い今西だから、懲らしめられたのかも知れないと、今では宏尚は思っている。

2. 入浴

数日もすると、宏尚は看護師に掴まり立ちしてトイレに行けるようになった。

そうになると風呂にも入りたくなるのが人情だ。

夏の暑さで昼も夜も汗びっしり。髪の毛も体中が汗臭いから、シャワーだけでも浴びたいと要求した。

すると翌日の三時ごろ、前嶋苑香が車椅子を押して部屋に入ってきた。ベッドの上でTシャツを脱がされ、パンツも脱がされて素っ裸にされた。

今西も居なくなった今は一人部屋状態なのだが、せめてカーテンぐらい閉めて欲しいものだ。廊下を行き来する人から丸見えじゃないかと、思わず口から不満が出そうになった。

本当は美鈴さんにやって欲しかった……などまでは言うまいが。

だが、そうも言っていられない状況だ。とにかく体を洗いたい。いや、まだ一人では無理なので、洗ってもらえるのは有り難かった。

大きなバスタオルでグルグル巻きにされて、車椅子に乘せられるとき、ふいに杉本美鈴が現れた。そう、彼女は基本的にこの部屋の

担当なのだ。

宏尚は二人に連れられて廊下の奥の風呂場に入った。

両脇から抱えられて鏡の前の洗い椅子に座る。苑香が珍しく気遣うように言った。

「下着の着替えって、どうしてるの？」

「は？　　ないです」

「やっぱりね。この前来たのは、会社の人？　　お友達？」

「会社です」

「着替えを頼める人って、いないの？」と、美鈴が割り込んだ。

宏尚は押し黙った。

気が付くと、風呂場から出ていく苑香の後姿が鏡に映っていた。

「彼女、ナースセンターへ戻ったの。向こうも人手が足りないから。大丈夫よ、あとは私一人で出来るから」

と、鏡の中で美鈴は言った。

シャワーを頭からかけ、シャンプーで髪を洗ってもらう。床屋の

ようなきめ細やかさはないが、それでもすつきりとして気持ち良かった。なにしろ二週間ぶりなのだ。

「目を閉じててくださいね」

ざっとではあるが顔を洗う。脂ぎってしまった肌がキュツとした。背中にお湯を掛けて洗い始めたとき、美鈴は言った。

「町田さんって、こっちの人？ 一人で暮らしてるの？」

会社の人しか見舞いに来ないのだから——しかも営業がひとり——、誰だってそう思うだろう。

「はい」

でも、『寮を追い出されました』とは、もちろん言い辛い。

退院したら寝る場所がない。かといって、ここに長居すると請求書が怖い。

ああ！ なんて俺は不幸なんだ！

けっして丁寧ではないが、美鈴は胸や腹を洗ってくれている。

「ご家族は？ 家は遠いの？」

「遠いです」

「連絡したの？」

宏尚は足を洗っている彼女を見ながら、首を振った。

「家の人に来てもらうわけにはいかないの？」

「着替えの下着のことですか？」

「ええ、たとえばだけど」

「田舎は兄貴の家族と、年老いた両親で手一杯なんで。迷惑かけられないし……下着買います。コンビニで。近くにありますがね？」

美鈴が頷いたところは見えなかった。彼女は桶の湯を肩からかけた。

3. 庭先

その週の土曜日。午後は外来がないので、病棟も人の行き来がほとんどない。

宏尚は久し振りに戸外にいた。病院の裏庭の建物の影に置かれたベンチのひとつに座っていた。

短い距離なら右足を引きずり加減に歩くことが出来るようになった。

昼休みの美鈴と一緒にここまで来たのだが、彼女は来るなり、

「ちょっと待ってて」と言い残して何処かへ行っただけだ。

Ｌ字に建った別棟の窓に人影が見えた。お年寄りの患者を車椅子に乗せて押す前島苑香だった。

目があって会釈を返したが、苑香の元へ廊下を急ぎ足でやって来た美鈴が、何かの包みを胸に抱えて二言三言話している。宏尚はその様子をずっと見ていた。

美鈴は小気味良く頭を下げて、また廊下を急ぎ足で戻ってきた。ニコニコしながら庭に下りて来た。

「はい、これ！」

「な、なんですか？」

花のように微笑む顔から、包みに視線を落とし、中を覗いた。

「おパンツ」と美鈴は笑った。

「え？ 僕の……」

「そっ、三枚で九百八十円。安くてごめんね」

宏尚は首を振った。

「必ず返します」

「うん、当てにしないで待ってる」

美鈴は横に座った。「会社、辞めさせられたんでしょ？」

宏尚はうつむいた。

「なんで分かったんですか？ 誰かに聞いた？」

そんなことを美鈴に告げる者などいない。

「やっぱりそうなんだ。見てれば分かるよ」

「会社っていうか、派遣先。漬物工場だったんだ。ポケットとしてた僕も悪いけど、フォークリフトに挟まれて」

「そう。ついてなかったね」

「うん」

「で？ この前お見舞いに来たのが工場の人？」

宏尚、また首を振る。

「派遣会社の営業」

「あ、ごめんね。それ、この前話してくれたっけ」

そこまで話したかどうか覚えはない。

なにしろあの時は、頭のとっぺんから足の先まで美鈴に洗われていたのだ。そんな状況で◎ン◎コギんぎんの二十歳の若者に、覚えていられるわけがない。

「はあん」と、なにかに納得したような表情の美鈴。その声が少し色っぽい。「例の派遣切りってことなの？」

宏尚は急に憂鬱になった。大怪我の後には、鬱病にもなりそうだ。

「美鈴さん」

「ん？」

「あの、こここの入院費用だけど」

「うん」

「三週間ぐらいだと、どのくらいになりそうですか」

「さあ」と首を傾げた。「わたし、お金のことは……ぜんぜん貯えないの?」

「一万ぐらい」

「あら」

住む所もないけどね、と宏尚は鬱になる。

「足りなかったら」——絶対足りない。「兄貴に頭下げて借ります」

——無理だ。

「町田くんって、お友達いないのね」

「これからつくります」

友達付き合い出来そうな奴と、出会わなかったただけだ。

「退院したらどうするの? 泊まる場所あるの? 実家へ帰るの?」

「いえ」

実家に宏尚の居場所はない。

美鈴が窓の方向を見遣った。名前を呼ばれたのだ。

振り向くことなく建物に消えて行ったが、すぐに戻ってきた。

「あまり長居はまだ良くないから、病室へ戻りましょ」

4. 消灯

夜の九時には消灯となる病棟の中は、けっして静かではない。唯一灯りの点った廊下を通じて、各部屋の声が聞こえてくるからだ。それは痛がる声だったり、泣き声だったり、呻き声だったりする。

窓の外から近付いてくる救急車の音が聞こえる夜もあるが、その点に関しては今夜は静かだ。いや、サイレンだけだが。

先日、別の部屋へ女の人が運ばれて来たらしいが、宏尚の居る部屋は相変わらず彼ひとりだった。

いい加減、話し相手がないのは、めげてきた。あの煩く感じた今西が懐かしく感じるのだから相当だ。

今、何時だろう。

宏尚は枕元に手を伸ばして、インターフォンの大きなボタンを押した。即座に応答があった。

「はい！ どうしましたか？」

声の感じから、美鈴だった。今夜は当番だったのか。

「すみません、トイレ、お願いします」

「はい！」

もうかなり回復してきて、一人で出来る自信はあるのだが、勝手にやると看護師に怒られる。特に苑香に怒られたら、結構なダメージでしょげてしまうのだ。

夏の夜は、汗になって出ていくのがほとんどだから、トイレに行く回数はそんなに多くはないが……。

ナースセンターから廊下をやって来る足音がして、やがてドアがノックされた。

「今夜も蒸すわね」

と言いながら美鈴が入って来た。血圧計を持っている。

「あとで計らせてくださいね」

「先でいいですよ」

「我慢できるの？」

「いえ、我慢っていうか……」

「そう？　じゃ先に」

美鈴はベッドの脇に屈み、宏尚の腕の汗をタオルで拭いた。着ているTシャツもすでに、びっしょりだった。

「冷房、もう少し下げられないんですか？」

「寝られない？」

宏尚はうなずきながら、血圧計が締め付ける作動音を聞いた。

「ごめんなさい」

返ってくる答えは分かっていた。「この階で管理しているんじゃないのよ。我慢してね」と、済まなそうだった。

宏尚は着ているものが汗臭いことの言い訳に、話を向けたに過ぎない。実際、患者なんて夜寝られなければ、昼寝ていれば良いのだから。

「はい、終わり」と美鈴。

先ほどのタオルで、宏尚の額の汗を拭き始めた。

「あ、すみません」

「着替えたほうがいいわ。今日買ったパンツは？」

「テレビの横です」

美鈴は、宏尚のTシャツを脱がせた。そして体の汗を拭く。袋からパンツを一枚取り出した。

宏尚の腰の後ろに手を入れると、汗でびしょ濡れのパンツを脱がせた。太腿を拭きながら、

「随分直ってきたわね。肌の色がいいわ。あんなに変色していたのに」

宏尚は頭だけ起こしながら脚を見た。脚の色より、股間から突き立ったものの方が気になった。どんどんむくむくと起き上がり、かたく大きくなっていく。

美鈴はそのまわりの汗を拭いていた。宏尚がベッドの上に置かれた新しいパンツに目をやったときだった、美鈴の手が◎ニ◎を横に押さえた。

彼が驚いて見ると、タオルを持った手が股間に入り込んだ。

「う！」

思わず宏尚の口から声が漏れた。

いつもどおり素知らぬ顔でいると思った彼女の視線が、宏尚に注がれていたことに彼は気付く。あとで思い返してみたとき、ほんの数秒のことが、この時は一分にも思えた。

目が離せないでいると、突然ベッドが揺れた。ベッドの上に美鈴が膝を立てて上がっていた。

薄い夏物の制服。そのスカートの裾をたくし上げて、真っ白いパンティに指をかける。

そして下げた。

宏尚はその様子を、まるで蠟人形にでもなったように固まりながら見ていた。

美鈴が◎二◎の首を握った。

「ううっ」と、堪えた宏尚。

自分の腰を跨いだ美鈴が、◎二◎を体内に包み込むところを見ていた。

「み、美鈴さん……」

自分より二つ年上の女が、なにを考えているのか知りようもない。それよりも美鈴のほうが相手の目をずっと見ていて、彼女のほうが彼の気持ちを——いや感情を探っているように思えた。

美鈴はスカートの裾を、ぐいっと引っ張って股間を隠した。そして腰を動かした。

細い二の腕の脇を締め、宏尚の腹に両手を添えるようにして身を振っている。

女の前髪がたれて、彼の胸をくすぐっていた。美鈴は前屈みになって、宏尚の両脇に手をついた。

「あっあっ」と、か細くて可愛い声が漏れて、必死に腰を上下させた。

もう、限界。宏尚は突き上げそうな声を殺して、仰け反った。

その途端、美鈴は大きく腰を浮かせて◎二◎を解放した。

宏尚の胸の上に突っ伏した美鈴。

スカートなまめの後ろが捲れ上がって、薄暗がりの月明かりに浮き出た
白い尻が艶なまめかしかった。

5. 提案

翌日の昼近く、二人は病院の庭に出た。夜勤明けの美鈴は家に帰るところだったが、そこで彼女から提案があった。

「わたしとこのアパートでよかったら、引っ越して来ない？」

「え！？ 僕が美鈴さんと一緒に暮らすんですか？」

「ちょっと」美鈴は笑った。「違うわ」

宏尚は彼女の言葉を待った。

「住むところ、ないんでしょ？」

宏尚はうなずいた。

「お金もないんでしょ？」

こうして改めて言われると、実に情けなかった。

「まだ少し足を引きずってるけど、もう大丈夫です。一日も早くこ

ここを出ないと……入院費用がかさむ一方だから」

「退院したら早く仕事探さないとね」

美鈴の説明では、アパート自体はとても古いが二階の一部屋が空いていて、風呂なし共同トイレの四畳半で、月四千円でよいということだった。

「なんでそんなに安いんですか？」

「そんなに期待しないで。古いのよ、建物が。いま空いちやつてるから、住んでくれると、こっちも助かる」

今の宏尚に風呂なし共同トイレでも文句が言えるわけがない。こんな有り難い話はそうそうないのだ。

それに、家賃は最初の給料日から払えばいいのだと言う。

「そんな！ それじゃあ、あまりにも甘え過ぎだから！」
と遠慮のかまえを見せたら、

「それまでの分も、しっかり加算しての話よ。だから早く仕事見つけないとね」

とピシッと言われてしまって、己の甘さがつくづく嫌になった宏尚だった。

なにはともあれ、体をしっかり直さないと。そして仕事探さないと――。いつもの明るい足取りで帰って行く美鈴の後姿を見ながら、宏尚は決意を新たにした。

「了」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6617p/>

天使の瞬き - ANGEL ' S WINK

2010年12月27日03時57分発行